関西自然保護機構会報（17）41－44，1989

人とシカが共存できる環境づくりを！
― 保護運動にとりくむ私たちの経験から ―

木　下　陸　男
（社団法人・大阪自然環境保全協会）

保護運動を進める上で

私たちはアマチュアの研究グループですので，専門家である先生方の発表にコメントできる立場にはありません。そこで，今までの報告の中で感じたことを，私たちの経験を含めて述べることにいたします。

私たち（社）大阪自然環境保全協会は，「都市と自然」の共存ということを大きなテーマとして運動を進めてきました。そして1978年頃からは，大阪府下に生息するニホンジカやキツネ，タヌキ，アナグマ，テン，リスといった野生動物の保護に，講座（ナチュラリスト講座）を設けるなどして積極的に取り組んできました。そこでは，これらの都市周辺に生息する身近かな動物と人間が，どうすれば共存できるかが重要なテーマとなっています。この立場から大阪におけるニホンジカの現状を見ますと，次のような状況にあります。その一つは「生息場所が開発などによって，直接的に失われることによって，もう一つは動物たちの主な生息場所である里山が，農業構造の変化などによって放置され，植生が変化し，暮らしにくゝなることによって，そしてさらに，自然との共存思想を持たない多くの都市生活者の侵入（狩猟，踏み込み，ゴミの投棄，野イヌ，野ネコ，その他）などによって急速に絶滅への道をたどっています」（木下　1988）。

今日，さまざまな立場からの研究の結果，生物学や生態学の分野での多くの成果がありますが，環境の変化にともなう適応能力や生態への影響など，ニホンジカの保護にとって欠くことのできない，多くの不明の部分が残されているように思います。

私たちが取り組んでいる自然保護，野生動物保護の運動の立場からしますと，ニホンジカを始め；日本の野生動物を守る上で第一に必要なことは，その生息地を確保することであると思います。大阪府下に生息するニホンジカを保護するためには，その主な生息場所である，いわゆる「里山」の保全が必要であると私たちは考えています。したがって，現在その保全と活用について調査，研究を進めています。

大阪のように古くから都市が発達した地域では，その周辺に生息している多くの野生動物，中でもシカ，キツネ，タヌキ，アナグマ，イタチ，リスといった動物たちは，おそらく長い農耕文化によって作られた二次的自然や，人間活動によって変えられた半自然的環境に適応して生き続けてきたものと考えられます。その意味では，現在私たちが営む都市文明とこれらの野生動物のかゝわりは，歴史的にも極めて浅く，共存でき得る環境を確立しているとはいえません。このような観点からニホンジカの保護を考えた場合，それぞれの生息環境の状況に応じた次の三つのケースが考えられます。

(1)　シカと人とが全くかゝわりの場をもたない。（原生林などに生息し，厳正に保護されてい

関西自然保護機構業績第70号

る）

(2) 人の影響はあるが，シカと人とが干渉しない。（農耕地を含む自然活用型の環境において，双方のコントロールが必要とされている）

(3) 人とシカが直接ふれあうことができる場がある。（奈良公園やディア・パークのような型）

以上のようなそれぞれのケースにおけるシカの生態学的，社会学的研究はもちろん，人間社会，あるいは人間活動の分野を含む新しい研究が必要ではないかと思います。すなわち人間とシカを始めとする野生動物（自然）との共存のためには，新しい地域生態系（この表現が正しいかどうかわからないが）の確立ともいえる政策的な提言が必要ではないかと思います。

野生鹿連続殺傷事件－書けなかった事実

私たちは1986年に，当関西自然保護機構などの援助で「野生鹿の慟哭」（木下ほか　1986）という報告書を出版しました。この文書は1977年から取り組んできました，大阪府下のニホンジカ保護の運動についての報告と，1984年12月より連続的に発生した，箕面市白島地区における野生鹿殺傷事件についての報告であります。編集上の不備で続みづらい点もありますが，アマチュアの熱心な調査や救出活動についての生の報告であり，それなりに価置のあるものと思います。本日は，同報告書に掲載できなかったいくつかの事実について報告したいと思います。なおその一部は報告書のＰ70～Ｐ76にわたり日時，時間経過を追って記録されており，丹念に読んでいただければこの事件の本質を読み取ることができると思います。

同報告書に掲載しなかった事実とは，警察及び猟友会の一部グループと暴力団に関するものであります。

（以下都合により内容を一部替えて追記いたします）

野生鹿殺傷事件の起った箕面市白島地区は，大阪の中心街からまっすぐ伸びた幹線道路＝新御堂筋線の北端に位置し，芸能人や財界人などの高級住宅が建ち並ぶ地域で，大阪平野を一望に見わたせる閑静な住宅地であります。

一方同住宅地に接する山際や山麓部は，道路計画，鉄道計画，レジャーランド計画，大規模宅地開発からテクノポリス計画に至るまで，次々と開発計画の話題にこと欠かない地域でもあり，大手デベロッパーから悪質不動産屋まで，表通りより裏街道の似合う連中の活躍の場ともなっています。

本事件当時はグリコ・森永事件や暴力団山口組の竹中組長殺害事件など，次々と凶悪事件が連続し，関西財界のトップが多く住んでいるこの地域では厳重な警戒体制にありました。その鼻先で毎夜銃声らしき音と，シカの死体が連日のごとく池に浮かんだのです。まさに怪人21面相が予告した通り「……箕面の里のモミジ（鹿と同意）狩り」がおこなわれたのではないかと思われるほど異常な事件でした。当初大阪府警でも検死官や科学捜査員まで動員して調査し，２月２日にはおそらく，日本で初めてニホンジカ（♂）の司法解剖が大阪医大においておこなわれました。

この地域に生息するニホンジカは，1978年に私達が調査した結果では北部の鉢伏山から止々呂美，青貝山地域に５頭（目撃）～７頭（聞き込み）が生息していました。この時点では国定公園の南部地域に群は確認されていませんでした。そして1982年における「箕面山サル生息域のホ乳動物調査」（木下ほか　1982）によって才ケ原池南部地域にオスジカを含む数頭のシカが生息することが確認されました。

北部の鉢伏山地域には，毎年猟期に幾組も狩猟グループが入山することや密猟もあって，捕獲

禁止の措置が取られているにもかゝわらず，あまり増えませんでした。しかし，箕面国定公園南部の山麓に生息するグループは，公園と銃猟禁止区域に挟まれた地域で，住宅地に接していることもあって着実に増えていたものと思われます。

今回の殺傷事件によるシカの追い出し地域は，主に才ケ原林道と府道茨木－亀岡線に囲まれた地域と考えられます。しかし，事件後の調査では青貝山や妙見山麓地域にまで影響が広がっていることから，あるいはもっと広範な地域から計画的に追い出されたことも考えられます。

実行の方法は報告書の栗谷推論（P113～P116）に述べられています。「まず才ケ原の下から上方（北方）に向かってはじまり，東方に向う。あるいは北（勝尾寺方面）から追い出すルートと合流し，谷山尾根を南下する。この間に設けられたいくつもの待ち場（射手＝両ルートに約10ケ所）を抜けたシカは最後に白島のため池群（五藤池，薩摩池，新薩摩池）に逃げ込むが，ここにもイヌの回収ととどめ役の人間が配置され，音のあまりしない方法を用いて殺すらしい。ここをも幸いに逃げのびたシカはいったん如意谷方面にのがれるが，やがてまた右回りの死のループに巻き込まれる仕掛けになっている」（栗谷　至　1986）。

この死のループに巻き込まれたシカの内，17頭が私たちによって回収され，検死，解剖などによって報告書に記録されています。そして，この死のループから逃れた数頭は新御堂筋を駆け下り，ビル街を逃げまどい，一部は車に刎ねられて死亡，一部は水路や街中の藪の中に逃げ込んで住民に保護されるといった事態となったのです。そして死のループによって撃ち倒された幾頭かは，あるルートによって焼肉店などに配送され「シカサシ有ります」のメニューとなってグルメの口の中に消えたものと思われます。

今回の事件は，コントロールを失い暴走する都市の社会的，精神的荒廃を背景とした恐るべき内容をもった事件であり，1985年は特別の意味をもった年であるといえます。

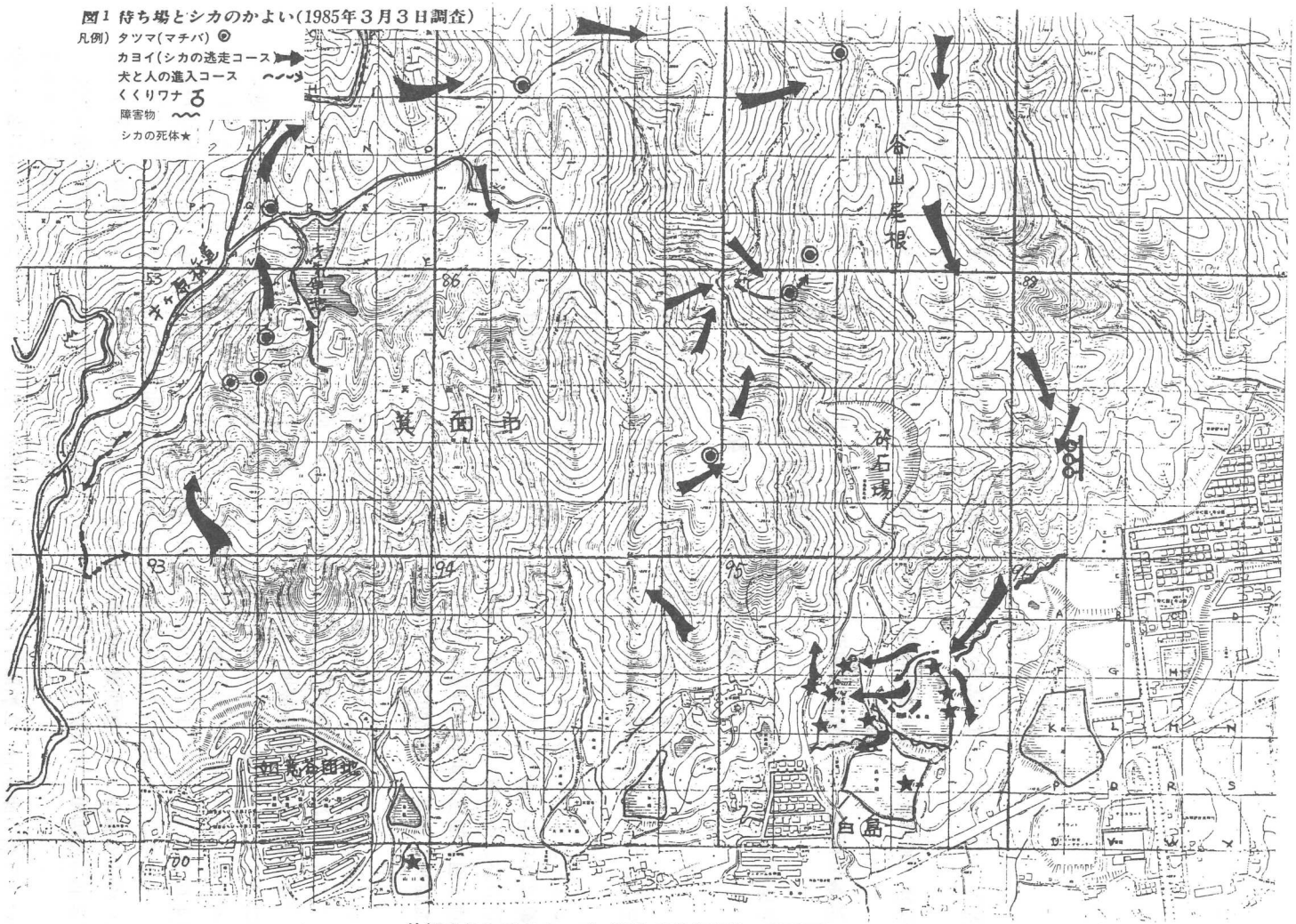
参 考 及 び 引 用 文 献

木下陸男　1988. 都市（大阪）における「みどり」の保全. ブナと原生林・現代文明を考える全国集会資料集，224－231. 長野県自然保護連盟.

木下・池田・大野ほか　1986. 大阪の鹿生息状況と箕面野生鹿連続殺傷事件. 野生鹿の慟哭（社）大阪自然環境保全協会.

木下・栗谷・西尾ほか　1982. 箕面山サル生息域におけるホ乳動物の分布と生息状況，箕面山猿調査報告書，箕面市教育委員会.

栗谷　至　1986. 箕面野生ジカ連続殺傷事件 (6)推論. 野生鹿の慟哭，113－116（社）大阪自然環境保全協会.



仕組まれた死のループ（野生鹿殺傷事件の現地図）